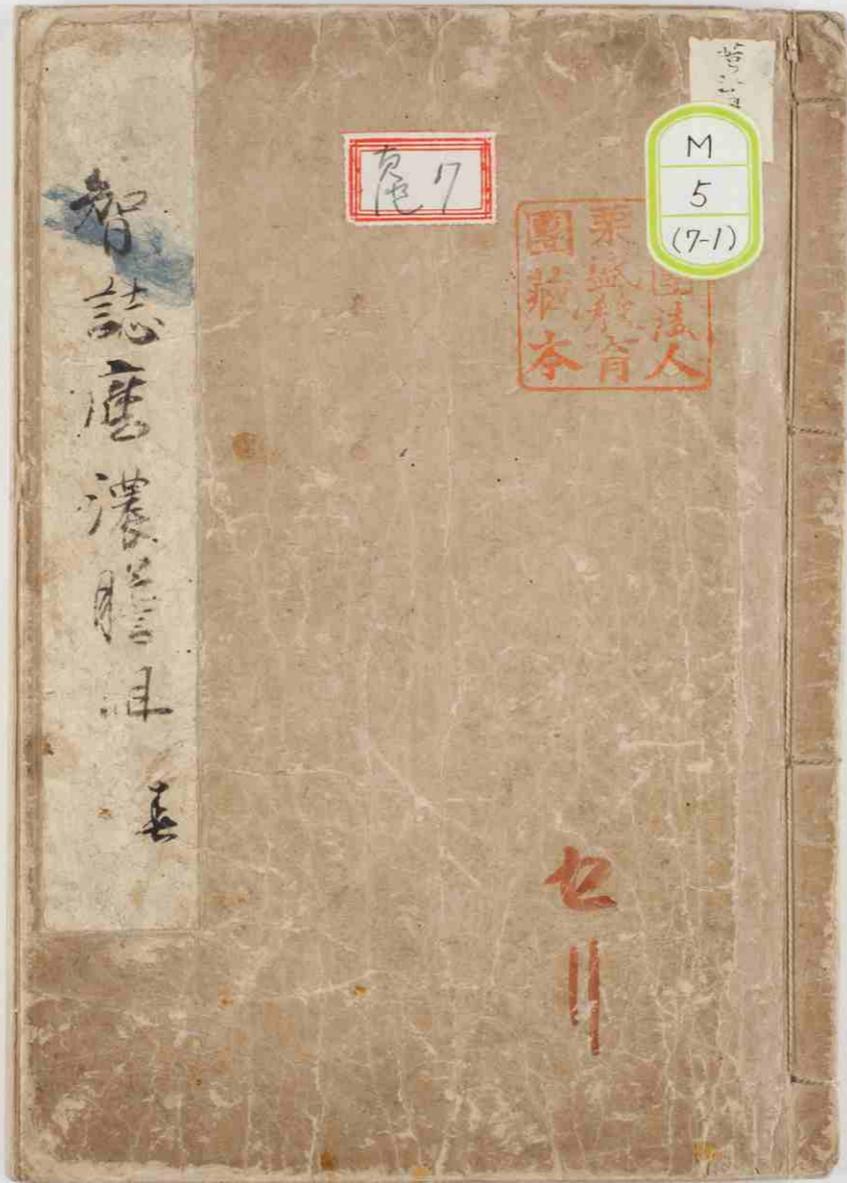


破損あり

以下 汚れあり



虫食いあり

寛政四年壬子れむつに
やふひのす書きてと記す

近江神の瑞籬とひの七の御社小の御飯
 更神明の御飯
 神路山内外の宮に白の玉串の御飯
 幅のうんやあや
 長田の宮に御飯
 徳形
 神に
 八松豊受胎の神垣
 羽黒の神
 海間の神

馬形神
 文道太祖廟
 松前廣長
 繪之
 神符
 百鬼畏之
 符と桃木の枝
 神符
 百鬼畏之

ふまのてしひとら半はきもは海よりえ
返り文子

初春の事とてふ事ありては
二日文字の御事とては
て文子に記す

是をてふ事ありては
かたのりけし返り

又ひやらの事とては
時のもは解つては

初春祝
三の御事とては

三日北の神の事とては
初春の事とては

題とては
五鈴川とては

社頭子日
神事とては

牛の事とては
山とては

あまの事とては
三

惜落花

松の葉のぬ指のあひもぬのふとさうら

手惜別巻
ふ別名疎の袖と云ふもさひきり
九日好の晴と海の遠くまきさうらうと
名や飛と

そのあつらひ花をこころしきや
十日予の松三首と詠ふ
浦霞

浦霞隔松

浦霞の松をよみかひはしき
孤嶋霞

みづけも浪をぬそぬ離島あふ
十日の松御社に詠ふ
と云ふ松のわらわらとてぬつた
初春水

おのころ心とるる松水
題とすうらうとて又そとて
長衣の松衣はるる浦遠くはけり

柳似煙

遠く松のたけけ外はあはるる
松上之孫

春車は花散る色をうらむる夜は松枝
常盤のついでに海に花散るにあらざるを
寄車窓

人もさながら春車は花散るにあらざるを
わたりて度おもはるる海に花散るにあらざるを
旅宿

春車は花散る色をうらむる夜は松枝
常盤のついでに海に花散るにあらざるを
十二日夜のまじりたる花散るにあらざるを
わたりて度おもはるる海に花散るにあらざるを

十三日夕より春車は花散るにあらざるを
わたりて度おもはるる海に花散るにあらざるを
わたりて度おもはるる海に花散るにあらざるを

日待のまじりたる花散るにあらざるを
わたりて度おもはるる海に花散るにあらざるを
春車

春車は花散る色をうらむる夜は松枝
常盤のついでに海に花散るにあらざるを
春車

春車は花散る色をうらむる夜は松枝
常盤のついでに海に花散るにあらざるを
春車

春車は花散る色をうらむる夜は松枝
常盤のついでに海に花散るにあらざるを
春車

春車は花散る色をうらむる夜は松枝
常盤のついでに海に花散るにあらざるを
春車

あり増りて身もなれども新あはれりかゝくの
太君かく一夜の引くまゆりも形もなれども
人よきもなれどもなれども又もなれども
あゝ形もなれどもなれどもなれどもなれども
河上霞

折梅花
舟の引舟りよびてゆく家もなれども
長雲のなれどもなれどもなれどもなれども

柳麿比
長江の側よ吹通す庭の柳もなれどもなれども

寄柳窓
春のなれどもなれどもなれどもなれども

廿六日法幢寺に
廿七日君もなれどもなれどもなれども
霞中餘寒

冴より好風をきき當に十江裏の衣麻舟山
清見の河の〇望し袖冴く雲村夜團のそわく

山君詠実

玉葉之煙葉小家も去の冴る雪吹たる名
嶺えて折し葉の夕方替の里に半む也る

水亭文梅

見さすに水中をぬれ也一夜名也梅の下
望梅の色下れさる雪の白花さる名も一

多年也梅

中日に増れを香し梅とあてめあし葉もくも
のあはれもさもくもさる名も出れ凡れはあ
昔露祝とくすれと

此名に数りたむひあはれし名もあはれ
廿九日らきもさる名も

二月一日、品川あじう四十、竹祝、
とて、

早井の、
ゆづ、
雪、
その、
と、
か、
あり

その朝のちもはるかに空をわたりてゆく
正徳の初年にしては雪の降るはるかに
夜の月も白くありて、あつたはるかに
二日夜遠より、泊川の波より、任るはるかに
事としてしめぬ

浪の音をききしは、あつたはるかに
夕なり、文子もももも、あつたはるかに
あつたはるかに、あつたはるかに
あつたはるかに、あつたはるかに
あつたはるかに、あつたはるかに

三日、ついでに、あつたはるかに
あつたはるかに、あつたはるかに

その朝のちもはるかに空をわたりてゆく
正徳の初年にしては雪の降るはるかに
夜の月も白くありて、あつたはるかに
二日夜遠より、泊川の波より、任るはるかに
事としてしめぬ
浪の音をききしは、あつたはるかに
夕なり、文子もももも、あつたはるかに
あつたはるかに、あつたはるかに
あつたはるかに、あつたはるかに
あつたはるかに、あつたはるかに

せむら見夢人じらあたな心者んあてりて
 阿羅漢さ二辨三辨ありてあてり半々あてり
 せんさのくあてりあてりてあてりあてり
 せん銀の岩さあてりあてりあてりあてり
 法の作る心月の光をあてりあてりあてり
 此僧侶じりあてりあてりあてりあてり
 くらあてりあてりあてりあてりあてり
 くらあてりあてりあてりあてりあてり

せん二首ゆりしんあてりあてりあてり
 の羅漢佛の説はあてりあてりあてり

羅漢の二首ゆりしんあてりあてりあてり
 此夕例の易見文あてりあてりあてり
 文あてりあてりあてりあてり

依れあてりあてりあてりあてり
 誰あてりあてりあてりあてり
 題あてりあてりあてりあてり

梅香夜多
 梅香あてりあてりあてりあてり
 梅香あてりあてりあてりあてり

見とる伸あてりあてりあてりあてり
 見とる伸あてりあてりあてりあてり

山家抄

望梅のりより春に別れ道は喜野山里

梅葉袖

そのひの事梅を袖に山をて月袖の梅

旅宿抄

見百中しん旅の愛者伏見里梅下知

行路抄

昔柳のふり色ふり梅の事梅をて梅

橋邊抄

昔の事梅をて梅をて梅をて梅を

故郷抄

ふりしん梅をて梅をて梅をて梅を

春山月

尺のふり梅をて梅をて梅をて梅を

春月抄

梅をて梅をて梅をて梅をて梅を

笠遠路也

笠遠路也
笠遠路也
笠遠路也
笠遠路也
笠遠路也
笠遠路也
笠遠路也
笠遠路也
笠遠路也
笠遠路也

追逐也

追逐也
追逐也
追逐也
追逐也
追逐也
追逐也
追逐也
追逐也
追逐也
追逐也

山泉流水

山泉流水
山泉流水
山泉流水
山泉流水
山泉流水
山泉流水
山泉流水
山泉流水
山泉流水
山泉流水

十三日

窓前寫

寄燈戀

寄燈戀
寄燈戀
寄燈戀
寄燈戀
寄燈戀
寄燈戀
寄燈戀
寄燈戀
寄燈戀
寄燈戀

十六日

竹林寫

水邊梅

水邊梅
水邊梅
水邊梅
水邊梅
水邊梅
水邊梅
水邊梅
水邊梅
水邊梅
水邊梅

寄貝窓

寄貝窓
寄貝窓
寄貝窓
寄貝窓
寄貝窓
寄貝窓
寄貝窓
寄貝窓
寄貝窓
寄貝窓

廿日

文子方

李豊ぬ

李豊ぬ
李豊ぬ
李豊ぬ
李豊ぬ
李豊ぬ
李豊ぬ
李豊ぬ
李豊ぬ
李豊ぬ
李豊ぬ

敬武ぬ

敬武ぬ
敬武ぬ
敬武ぬ
敬武ぬ
敬武ぬ
敬武ぬ
敬武ぬ
敬武ぬ
敬武ぬ
敬武ぬ

推後停

推後停
推後停
推後停
推後停
推後停
推後停
推後停
推後停
推後停
推後停

社頭梅

社頭梅
社頭梅
社頭梅
社頭梅
社頭梅
社頭梅
社頭梅
社頭梅
社頭梅
社頭梅

神垣の一夜の書けるに月送神より白梅枝
題にありて 遠山春月

長閑なる遠山梅枝の月を以て所愛も
花下送目

芳花出づる所を今も忘れぬか
蛙聲幽

山みづら子田井小し蛙をけり
澤杜若

波の邊の舟の舟とてささるる

うたげはささるる花に海もささるる
旅山風

世人の心もささるる山ありて
難忘戀

けしきぬき例とみえたり
旅山風

一めみえたるもささるる
旅山風

ささるる山路の旅の心もささるる

らぬ月半のうら花の夜多の精のり
 小のの顔のり
 あり名なきえけらん前までらぬと縁の
 子の重部とく三とくともあふ 推路草
 雪の峰と山嶽とをく道路のり
 遠山と月
 寄塵志
 別り夜より床のりも折人の形
 題と下りて 行路圖書
 つれとまにわけて旅のり人言路のり
 中まはるる人言のりと出のりけり

山路残雪

春の雪は春の夜油寒く君ぬ
 春の雪は春の夜油寒く君ぬ
 山路

寄山祈志

春の雪は春の夜油寒く君ぬ
 春の雪は春の夜油寒く君ぬ
 山路
 寄山祈志
 春の雪は春の夜油寒く君ぬ
 春の雪は春の夜油寒く君ぬ
 山路

潤二月朔のあけつ川を五返りあてりありて
さむく流る

梓ひめあつ衣袖寒く今如月と名まのむ
二日ありあより晴るり、季豊のぬりわひは馬
いそまのや、題ついつらとしくも笑へはま
長けのいふといふは

きあひの相子相くもすのり黒きたは
大天と帯のあつ油はく白糸のついで
山喜ぬ

谷川の水増く山喜ぬのあつたふとつは
目にそひくぬ海の色と三言の山は橋のあつ
河喜ぬ

梅葉のわたるるわが春は後言ぬはれ
大井の玉の春油のんぬはるるはれ

神遊

春の神遊の芝生にのりて
善の者も善の者も

待花

春の心は花を待ちて
春の心は花を待ちて

初七

春の神遊の芝生にのりて
三日の夕集ひかきひさり

やらの園二宮法樂の和歌とく
毎山有春

早蕨

春の早蕨の芽は
春の早蕨の芽は

恋

春の早蕨の芽は
春の早蕨の芽は

又日夜更の文十雲ありぬ

六日、夜過吾の遊に於てあはれ遠近の
多き所、ゆゑに云ふこと足らず、可なり病
けりし、いとひさしうらみぬ。

暁天喜月、
此日、文子、山部小集ひく十首の題に於て、

河春月、
あはれ、光と夜と、春夜、月を懸小松、
夜に、あはれ、山部小集ひく、あはれ、月を懸

遠村喜曙、
あはれ、月を懸、あはれ、月を懸、あはれ、月を懸、
あはれ、月を懸、あはれ、月を懸、あはれ、月を懸、

野喜毎、
遠方、山部小集ひく、あはれ、月を懸、
あはれ、月を懸、あはれ、月を懸、あはれ、月を懸、

社頭春雨、
あはれ、月を懸、あはれ、月を懸、あはれ、月を懸、
あはれ、月を懸、あはれ、月を懸、あはれ、月を懸、

戶外喜毎、
あはれ、月を懸、あはれ、月を懸、あはれ、月を懸、
あはれ、月を懸、あはれ、月を懸、あはれ、月を懸、

青柳、あはれ、月を懸、あはれ、月を懸、あはれ、月を懸、
あはれ、月を懸、あはれ、月を懸、あはれ、月を懸、
あはれ、月を懸、あはれ、月を懸、あはれ、月を懸、

庭の草花は世に傳へしはもぬるものなりて
花の如く又つるは是れも草花の如く
何れも世に傳へしはもぬるものなり

名所社
分物誰かたえりてはたかたの松の谷
附りて正木のつるはたかたの松の谷

浪洗石苔
葦原の波は世に傳へしはもぬるものなり

七日の霜冷く西の風はたかたの松の谷

物さうとてはたかたの松の谷
是れも世に傳へしはもぬるものなり

其の國最上川に造られた祖英と云ふ
此寺はたかたの松の谷にありて
すなはちたかたの松の谷にありて
きんさかりやしてはたかたの松の谷

八日かうちの二宮此は樂乃題とて
樵路躑躅 思不言志 海路

雨中待花

晴々の日はもて 花はさきよ 濡れ袖も 花を
長あけ 朝のいと水へ 庭の根へ 花を
山裏花庭

花のけのちも 雨は 雨は 雨は 雨は 雨は
花を 花を 花を 花を 花を
花を 花を 花を 花を 花を

花を 花を 花を 花を 花を
花を 花を 花を 花を 花を
花を 花を 花を 花を 花を

花を 花を 花を 花を 花を
花を 花を 花を 花を 花を
花を 花を 花を 花を 花を

山花市通

花を 花を 花を 花を 花を
花を 花を 花を 花を 花を
花を 花を 花を 花を 花を

花を 花を 花を 花を 花を
花を 花を 花を 花を 花を
花を 花を 花を 花を 花を

花を 花を 花を 花を 花を
花を 花を 花を 花を 花を
花を 花を 花を 花を 花を

花を 花を 花を 花を 花を
花を 花を 花を 花を 花を
花を 花を 花を 花を 花を

花影写水

白ひきまの下海美川に花の影を写す
海に花の影を写す花の影を写す

河邊花

正の枝を梅まゝに心して花を写す
正の枝を梅まゝに心して花を写す

汀花

海主を心して花を写す
海主を心して花を写す

泊花

舟に咲かす花を写す
舟に咲かす花を写す

都

都の花を写す
都の花を写す

古寺花

古寺の花を写す
古寺の花を写す

薄風

寄露窓

橋

静かなる風の吹くはるかに
 袖の小唄の聲は遠く
 春の光を待つて
 水郷花
 文子の地帯中へ尚座和歌二十首とて
 草庵と

山家花
 田家花
 園中花
 庭上花

破損あり

報償也

夕惜花

旅の志

心有花

花樹如垣

玉有蓮蓬

あつちのついでにふたつあつちのついでに
あつちのついでにふたつあつちのついでに
あつちのついでにふたつあつちのついでに
あつちのついでにふたつあつちのついでに
あつちのついでにふたつあつちのついでに
あつちのついでにふたつあつちのついでに
あつちのついでにふたつあつちのついでに
あつちのついでにふたつあつちのついでに
あつちのついでにふたつあつちのついでに
あつちのついでにふたつあつちのついでに

花遊一樹

花時心不静

寄花神祇

多花釋教

花數千年

山のふもとに花は咲き此のふもとに花は咲き
花時心不静
あつちのついでにふたつあつちのついでに
あつちのついでにふたつあつちのついでに
あつちのついでにふたつあつちのついでに
あつちのついでにふたつあつちのついでに
あつちのついでにふたつあつちのついでに
あつちのついでにふたつあつちのついでに
あつちのついでにふたつあつちのついでに
あつちのついでにふたつあつちのついでに
あつちのついでにふたつあつちのついでに

七日文子のぬ方より人の泣きをそ折溜りき
むとわらうて又わらうてまたわらうて

神亭董

今更神亭董の草の形を記す

山次は此を見し山草の葉は葉の形は

白後苗代 毎草葉は山田の形をなす

河邊苗代 河川に生ずる草の葉は

躑躅夾路 河川に生ずる草の葉は

水辺躑躅 河川に生ずる草の葉は

橋杜若

河川に生ずる草の葉は

杜若繞石 河川に生ずる草の葉は

欵冬前葉 河川に生ずる草の葉は

折欵冬 河川に生ずる草の葉は

瀧下欵冬 河川に生ずる草の葉は

陸原欵冬 河川に生ずる草の葉は

河川に生ずる草の葉は

里款冬

藤野始綻

国道

路傍

扉板

社頭藤

一、指ししむるは直に里の垣よりありて
長き中ねり山路の藤うらむるに社を
あつたてててり女もあつて世國を
人の路をさすもあつては藤のつら
人々もあつては藤のつら
らむるは國の垣よりありて

九日夜邊の海濱の方へ
多敷もよむるは

十日阿叫寺の梅さうり
おひとありてか
あはれ枝とひ
見ても
さうり
十日神の

枝の寄る花をみれば... せん枝をみて花の
りて... 花の

神も... 花の... 水のかげ... 花の...
花の... 水のかげ... 花の...
花の... 水のかげ... 花の...

花の... 水のかげ... 花の...
花の... 水のかげ... 花の...

十日小川... 花の...
花の... 水のかげ... 花の...

花の... 水のかげ... 花の...
花の... 水のかげ... 花の...

十三日... 花の...
花の... 水のかげ... 花の...

花の... 水のかげ... 花の...
花の... 水のかげ... 花の...

落花の... 花の...
花の... 水のかげ... 花の...

終見落花... 花の...
花の... 水のかげ... 花の...

山橋邊のつれづれのつれづれに
 落花風
 吹北よきれはつれづれの橋より海を流
 流を随ふ
 春の年らに根もつれづれに橋の横を流す
 夕暮花
 入道人のつれづれに橋のつれづれに
 雨後落花
 つれづれに橋のつれづれに
 山花も
 夕暮花
 落花満谷

花のつれづれに橋のつれづれに
 橋下落花
 花のつれづれに橋のつれづれに
 晴夜落花
 花のつれづれに橋のつれづれに
 落花意衣
 花のつれづれに橋のつれづれに
 名所花
 花のつれづれに橋のつれづれに
 十四日の暮のつれづれに橋のつれづれに

廿のちちる毎時二時三時四時五時六時七時八時九時十時十一時十二時十三時十四時十五時十六時十七時十八時十九時二十時二十一時二十二時二十三時二十四時二十五時二十六時二十七時二十八時二十九時三十時三十一時三十二時三十三時三十四時三十五時三十六時三十七時三十八時三十九時四十時四十一時四十二時四十三時四十四時四十五時四十六時四十七時四十八時四十九時五十時五十一時五十二時五十三時五十四時五十五時五十六時五十七時五十八時五十九時六十時六十一時六十二時六十三時六十四時六十五時六十六時六十七時六十八時六十九時七十時七十一時七十二時七十三時七十四時七十五時七十六時七十七時七十八時七十九時八十時八十一時八十二時八十三時八十四時八十五時八十六時八十七時八十八時八十九時九十時九十一時九十二時九十三時九十四時九十五時九十六時九十七時九十八時九十九時

文ありて新よ
 大のちちる類もいへりおのちちるは月のみを
 其真とて信りてとす未ゆふ
 月子とて西月とてともおもあそははたの
 海うかんしやういへり月の名
 心とて信りて海を信りて月を信りては
 此とて信りて海とてあそははたの
 月とてあそははたの海とてあそははたの
 十七日夜達とてあそははたの海とてあそははたの
 梅とてあそははたの海とてあそははたの
 一貫ふりかたて其寺とつたてては梅の白
 紅いりて海とてあそははたの海とてあそははたの

もの山をたぐりて人を長そかりたす神も白ひし鉄れ
 とひひれを返りあり
 花の山おろそ長ひのひつりて人の国をさしをれ
 あゆむるもま標馬遊馬さき那那高高人
 ひのち名標馬の枝うさも心してゆめ事知れ
 季豊のゆ歌武たさき標馬をさきさきにおてさき
 ちをたひりた松園身しにさかゆ信武の杉湯
 かりけぬ山うものりてさき津村標馬をさき
 紫の身也のまさかちちうささきつれけけさき
 くらむむら志ひさき川水子のせさき遠見の山見
 ち標馬さき桃すの枝さき海世にさきさきさき
 國へさきさきぬさきさきさきさきさきさき

又さき浪をさきさき破橋の山をさきさき
 遠さき一村ありたれと
 白やのさきさき山里とさきさきの標馬を
 谷のさきさきさきさきさきさきさきさき
 くのちさきさき
 遠道のさきさきさき山路をさきさきさき
 山鳩の鳴るさきさきさきさきさきさき
 さきさきさき
 山標馬さきさきさきさきさきさきさき
 標馬さき谷の河をさきさきさきさきさき
 さきさきさき山をさきさきさきさきさき
 さきの秋多きさきさきさきさきさき

破損あり

ちかやありは新井田のづゝのあそびをたすあはれ
 能くあてまゝくゝんていふはあはれ
 きたよまの盛等とけふなる夢むやも
 ひはるあはれと遠く田のあはれ
 かたきあはれ
 へんていふひつりよあはれ
 るこ徳かゝり
 ともひ
 やと碧梅園ついで枕流身にあはれ
 清江漁ふいふとつと
 かねの法然のうら
 かねの法然のうら

むつ屋と離れ少くも
 ちかやありは新井田のづゝのあそびをたすあはれ
 能くあてまゝくゝんていふはあはれ
 きたよまの盛等とけふなる夢むやも
 ひはるあはれと遠く田のあはれ
 かたきあはれ
 へんていふひつりよあはれ
 るこ徳かゝり
 ともひ
 やと碧梅園ついで枕流身にあはれ
 清江漁ふいふとつと
 かねの法然のうら
 かねの法然のうら

長崎

勿谷の山路の傍りにもありし
長崎の風物もさういふ
草菜露

寄桂巻

あつたつた桂巻も
寄桂巻

いつかおれも
の世も

寄楸巻

寄楸巻
社頭社

廿四日
増々

廿五日
友

この口より出たては三三のひまの龍の鳴り
りねん三三のひまの龍の鳴り財本と云ふは
子相のひまの龍の鳴り

左の文測りしやまを金社人六人五月無事
おたりおたりとておれもかたれせし
ひまの龍の鳴りしやまを金社人六人五月無事
おたりおたりとておれもかたれせし
ひまの龍の鳴りしやまを金社人六人五月無事
おたりおたりとておれもかたれせし

ひまの龍の鳴りしやまを金社人六人五月無事
おたりおたりとておれもかたれせし
ひまの龍の鳴りしやまを金社人六人五月無事
おたりおたりとておれもかたれせし

周防殿もむ相原周防守とむけ行めて
ゆめ館もあてなりむきよとておれも
武左とむきよとておれも
山相のゆめ館もあてなりむきよとて
おたりおたりとておれもかたれせし
ひまの龍の鳴りしやまを金社人六人五月無事
おたりおたりとておれもかたれせし

廿六日 虫 春くのみとよ可き 花水返し 郭二の
夕之れ ぢうく道つて十

草の盛に 離れ 知れ 文の 進す 寄る きた
廿七日 夕 暮し 春風夜言

春風の 夕暮し 夕暮し 花も 花も 花も 花も
寄る きた 虫

夕暮し 春風 夕暮し 春風 夕暮し 春風
松樹 春風

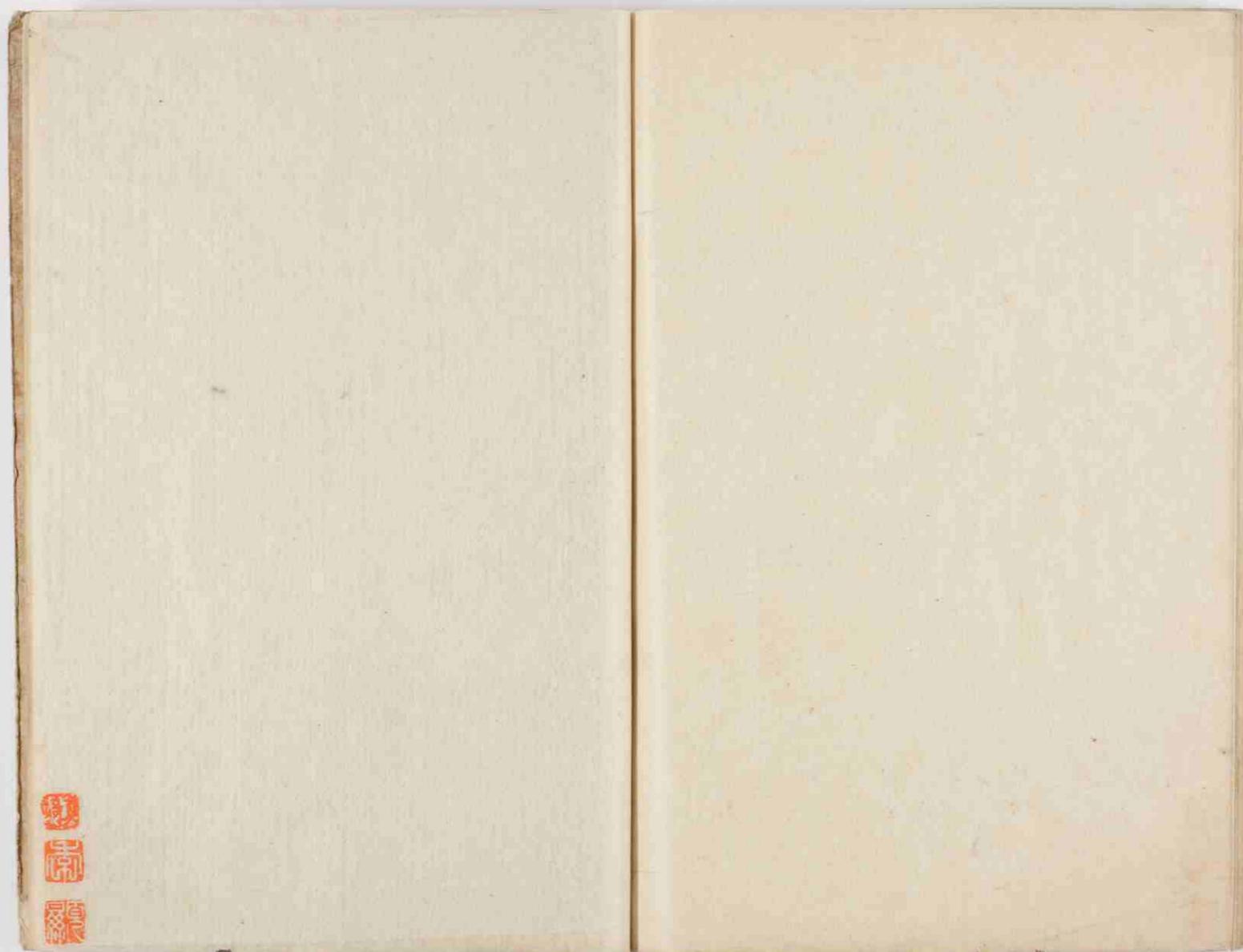
題 夕暮し 春風 改言 春風

夏 夕暮し 春風 夕暮し 春風 夕暮し 春風
夕暮し 春風 夕暮し 春風 夕暮し 春風

廿九日 人の こと 通存 あり あり 山 崇 け け

夕暮し 春風 夕暮し 春風 夕暮し 春風
夕暮し 春風 夕暮し 春風 夕暮し 春風

夕暮し 春風 夕暮し 春風 夕暮し 春風
夕暮し 春風 夕暮し 春風 夕暮し 春風



破損あり

